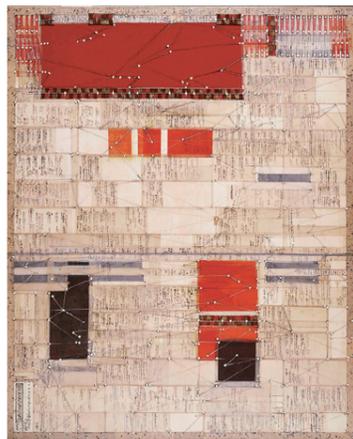




《構成 (コンストラクション)》1965年
岩手県立美術館蔵



《題名不詳》1991年
岩手県立美術館蔵



《壺景之内赤倉山久井名村住還圖》1999年
萬鉄五郎記念美術館蔵

村上善男

Yoshio MURAKAMI



1933年、岩手県盛岡市の染物屋に生まれる。岩手大学在学中の53年、二科展で《蛾》が初入選。54年に教職に就き、花巻市立湯本中学校へ赴任。翌年の第40回二科展に出品した《ヴァグースQ》が岡本太郎の目にとまり、この年新たに設けられた二科九室「太郎部屋」入りを果たし、岡本との交流が始まる。それまでのシュルレアリスムの表現から、形象化された人の手と糸で構成された「綾取りシリーズ」へ移行。

57年には転勤先の岩手町沼宮内で齋藤忠誠らと図り、同町在住者を主体として「エコール・ド・エヌ」を結成。60年から、工業製品をポリエステルで固めたアッサンプラージュによる「注射針シリーズ」、「計測シリーズ」を展開。

盛岡の高校教師として転勤する61年に、「エコール・ド・エヌ」を退会。さらに、岡本太郎の二科会脱退に続き62年から団体展への出品を取りやめ、以後、グループ展や個展を中心に活動。第6回シェル美術大賞展で第3席受賞。同年、詩人・高橋昭八郎に呼びかけ1日限りのショーを開催、このときの参加者と共に「集団N39」を結成。「集団N39」は、盛岡を拠点とした新たな前衛美術の運動体として注目されるが、次第にその活動は停滞、69年に解散。68年、仙台の三島学園女子大学家政学部生活美術学科(現・東北生活文化大学)に職を得て、70年から数字や記号を取り入れた「気象シリーズ」に着手。続く「貨車シリーズ」では、貨車記号のイメージを独自の詩的解釈に基づいて画面を再構成していく。

82年、弘前大学教育学部教授就任に伴い弘前に拠点を移す。津軽の民俗的大気魅せられ、新たに「釘打ちシリーズ」を構想。津軽風の裏打ちに使われていた古文書に美を発見し、裏返して画面に貼り付け、点を打ち線で結ぶ構成で津軽の風土の記憶とイメージを形象化していった。

2004年、盛岡に戻り、アトリエを花巻に設け制作を続けた。06年、石神の丘美術館の企画展「村上善男展—1950年代を中心に 冷たい計算から熱い混沌へ……」オープン直前の5月4日、盛岡市内の自宅で逝去。美術家のみならず研究者としても知られ、萬鉄五郎をはじめ郷土美術に関わる著述を多く残している。

※参考：『日本美術年鑑』平成19年版

岩手県立美術館コレクション展関連講座

没後20年記念シンポジウム「村上善男を語る」

日時：2026年5月31日(日) 14:00-17:00

場所：岩手県立美術館ホール

協力：石神の丘美術館

《プログラム》

コーディネーター：平澤廣氏 (萬鉄五郎記念美術館館長)

第1部 作品を語る

三上満良氏

(美術史研究者/元宮城県美術館副館長)

工藤健志氏

(田川市美術館館長/元青森県立美術館美術企画課長)

第2部 人を語る

松尾一男氏 (美術家)

田中久元氏 (元田中屋画廊主)

石山朱音氏 (村上善男長女)



「村上善男個展」会場にて
文房堂画廊 1956年

【お問い合わせ】石神の丘美術館 岩手県岩手郡岩手町大字五日市10-121-21 TEL.0195-62-1453

このリーフレットは、石神の丘美術館で開催する「コレクション+VOL.2 没後20年 村上善男展」の一環で発行されました

Design: デザイン工房エスパス 制作協力: 岩手県立美術館 萬鉄五郎記念美術館

表紙:

《南津軽郡富木館村久井名館千代吉婦還之圖(冬之圖)白》(部分)

1997年

岩手県立美術館蔵



東北はもとより、日本美術界に足跡を刻んだ村上善男の没後二〇年を機に、
青森、岩手、宮城、そして埼玉と、ゆかりの深い土地で顕彰活動が展開される

没後二〇年

追想 村上善男

Shio murakami 30.4.1997